AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2016.10) 平成27年度:51.

母親としての役割を実感した体験～NICUに入院となった低出生体重児の母親へのインタビューを通して～

武田 知美, 村瀬 舞美

母親としての役割を実感した体験

～NICU に入院となった低出生体重児の母親へのインタビューを通して～

キーワード：NICU、低出生体重児、母親役割、母子分離、母子関係

○武田知美[1)]・村瀬舞美[2)]

1)旭川医科大学病院　2)東北大学病院

Ⅰ．目的

NICU に入院となった低出生体重児の母親が、母親としての役割を実感した体験を明らかにする。

Ⅱ．研究方法

1.データ収集期間:平成 26 年 7 月～10 月

2.研究対象:気管内挿管による人工呼吸管理が必要となった低出生体重児の母親 3 名。予後不良な先天性の疾患をもつ子どもの母親は除外した。

3.データ収集方法:子どもの退院前に 1 対象者につき 1 回、30 分程度の半構成的面接を行った。また、基本情報は診療記録から収集した。

4.データ分析方法:面接内容の逐語録をコード化し、内容分析を行い、カテゴリー化した。分析の過程では、質的研究の経験のある者の助言を得た。

5.倫理的配慮:対象者には、参加は自由意志である事、拒否しても不利益を被らない事、プライバシーの保護に努める事、データは本研究以外には使用しない事等、文書を用いて説明し同意署名を得た。本研究は所属施設の倫理委員会の承認を得た。

Ⅲ．結果

1.対象者の概要

対象者 3 名の子どもの保育器収容期間は、9 日～96 日、入院期間は、約 3～5 か月であった。面接時間は 1 対象者につき 30～50 分であった。

2.面接結果

母親に子どもと関わる状況に関するインタビューを行った。【可能な育児の増加】【母親としての存在意義の実感(抱っこ・直接授乳)】の 2 つのカテゴリーが抽出された。

Ⅳ．考察

低出生体重児の母親は、子どもが新生児用ベッドに移床した後【可能な育児の増加】を感じていた。特に抱っこや直接授乳を行うことが【母親としての存在意義の実感(抱っこ・直接授乳)】に繋がっており、母親役割を実感していた。母親は妊娠中から、母親に対する漠然としたイメージを抱えている。しかし、低出生体重児を出産した母親は、自責の念や思い描いていた育児ができないもどかしさを感じながら、イメージとはかけ離れた育児を行うことになる。子どもの成長に伴い、イメージしていた母親像に少しずつ近づき、子どもの育児における責任を担うことにより、母親役割を実感できたと考える。

【母親としての存在意義の実感(抱っこ・直接授乳)】より、低出生体重児の母親が子どもからの非言語的なサインを受け取り、それに応答するという相互の関係性の構築が、母親役割の実感に繋がっていると考える。橋本[1)]の「低出生体重児と親における関係性の発達モデル」では、低出生体重児の母親や子どもについての認知・解釈の過程が示されている。低出生体重児の母親の心理や子どもの状態は移り変わっていくため、その時その時の母子の状態に応じて、保育器収容中から看護者が子どもの反応を言語化し、伝えていくことが必要であると考える。

Ⅴ．結論

1.低出生体重児の母親は子どもが新生児用ベッドに移床し、抱っこなどのできる育児が増え、イメージしていた母親像に近づくことで、母親役割を実感していた。

2.低出生体重児の母親は、非言語的なサインを受け取り、応答するという母子の相互作用の関係性を構築することで、母親役割を実感していた。

Ⅵ．引用・参考文献

1) 橋本洋子：NICU とこころのケア　家族のこころによりそって：第 2 版,メディカ出版, 19,2011.